

「バリアフリー観光」を目指して

NPO 法人 旅とぴあ北海道（旭川市）

「私自身、進行性のすい臓病だったのでよ。入退院を繰り返して大手術もやりました。私の 30 代は点滴と薬漬けの毎日……ベッドの上だけが人生……」

NPO 法人「旅とぴあ北海道」の代表理事である下間啓子さんには、まずそう言った。旅とぴあ北海道は「誰でも、自由に、どこへでも」をモットーとして障害者や高齢者への外出サポートを行っている団体。その設立者であり代表でもある下間さんの言葉である。

「でも、今の私を見て下さい。病弱な体には見えないでしょう。私は旅をしてきたことで、それが生きるエネルギーとなって、いまではすっかり病気が姿を現さない体につくられています」

下間さんは力強く話す。彼女自身がそうだったからこそ、障害者や高齢者にも旅をして欲しいし、それが気軽に出来るようなサポートをしたかったと、語り始めた。

■ マニラのスラム街で、人生の転機

下間さんの人生を変えたのは、フィリピン・マニラのスラム街に住む家族の中に飛び込んだこと。残りの人生をベッドで過ごすだ

けの環境に耐えかねた下間さんは、「ベッドの上で死ぬよりも」と、トランクに着替えよりも多い薬を詰め込んで一人でマニラに旅立った。



事業所に通う子供たちと共に笑う下間さん（中央）

そこは、劣悪な生活環境。高温多湿、異臭……。そのうえ、親子 2 世帯のほか親戚や兄弟など合わせて 10 人以上が共に暮らしていた。その中の誰にも仕事はない。下間さんの宿泊代が家族の収入源であった。病気であることすら忘れてしまいそうな生活に圧倒され、我を忘れてしまっていたという。

下間さんは、毎日スラムを散策して写真を撮った。外出する時には、彼女を守るため必ずその家の誰かが付き添ってくれた。ファイ

ンダーを覗いているとき、「なにか懐かしいものを感じたんです。走り回っている子供たちの姿が、自分の幼い頃を思い起こさせました」という。

何千枚ものスナップを撮った。

「住民が寄り添うようにして生きているその姿を見て、生きることの『すさまじさ』みたいなものを感じました」

そして、必死に生きようとしている自分自身に出会ったという。

帰国した下間さんは、沖縄の美しい海に見せられたり、各地を回ったりした。そんな旅を続けているうちに、悶え苦しむほどだったすい臓病「痛み」が徐々に無くなり、いつの間にか消えていた。

——旅が、生きるエネルギーを与えてくれた。そう確信したという。

この喜びを他の身障者の方達にも味わってもらいたいと、下間さんは仲間たちと1999年に市民グループ「旅とぴあ北海道」を設立。その翌年から介助ボランティアを同行したツアーや、トラベルサポーターの養成講座を実施した。2001年にNPO法人として登録。その後、活動の幅を広げて道外や、ベトナム・カンボジアなどの海外ツアーも行った。2003年には知的障害者のデイサービス事業所としての認可を受け、関連する福祉サービス事業などにも参入。2004年には会員が約250人となり、医師や弁護士などを含む5人の理事と、監事（税理士）によって運営していた。

しかし財政的な困難になり、2005年、旅

とぴあ北海道は存続の危機に陥った。総会で「事業所を閉めて電話1本だけの事業に縮小するか」との提案を出した。そんなとき、この活動に賛同してくれる人が現われて事業所の土地購入資金を貸してくれたという。

施設を増築して障害者自立支援のための事業所「SUN Room『ぴあねっと』」のリニューアルに取り掛かり、さらなる事業展開を始めた。

「賛同してくれる人、協力してくれる会員。そんな人々のおかげでなんとか運営できています」と、下間さんは振り返っている。

現在、旅とぴあ北海道では、障害者の旅のサポートのほか、障害児のデイサービスや生活支援などの福祉サービス事業も積極的に行っている。

障害を持った子供たちがデイサービスを受けるために事業所にやって来ると、スタッフ一人一人に嬉しそうに挨拶して回っていた。子供たちが喜んで通所しているのだと感じた。



「旅とぴあ北海道」の事業所外観

■ 介護支援者にとって

『難所』が多い観光地

旅をサポートする立場で「苦労していること」について下間さんに尋ねると、今後ますます高齢社会となっていくのに、バリアフリーに関する認識が観光業界においてもまだまだ低いという。

「例えば、旭山動物園。そこに行きたいという要望が一番多いのですが、あそこは山を崩して造られた動物園なので、アップダウンが多く、高齢者にとっても、私たちのような介護支援をしている者にとっても心臓破りの『難所』なのです」

旭川は観光地であるはずなのに、障害当事者の視点で設計されていないという。これまでバリアフリーと謳った施設をたくさん見てきたが、本当に利用者のためになるような場所は少なかったという。多くのホテルが、おざなりの設備に過ぎないと指摘している。

むしろ、国内旅行よりも海外の方が気苦労がないという。

「海外ツアーに行くたびに思うのです。現地はバリアフリーの設備こそ整っていませんが、人々の心がバリアフリーとなっているのです」

障害を持った人たちや高齢者でも「旭川はいい町だった」と楽しんで言ってもらえるような体制を、人の意識の方から変えていかなければならないと、強調する。

「旅とぴあ北海道が誕生して12年目。『バリアフリー観光』の種が、ようやく芽を

出してきたところですよ」

道内にバリアフリーツアーサポートセンターを設置し、ネットワーク化する構想もある。また、本当に障害者や高齢者の視線を考慮した「車イスごと入れる露天風呂付きのペンション」を自分たちでやりたいと、まだまだ下間さんの情熱は冷めない。

「自分の病気が再発して旅に出られなくなるときのために、このNPOを作ったようなものですから」

下間さんはそう言いながら最高の笑顔を見せた。



サロマ・能取湖紅さんご草鑑賞ツアー（2001年9月）

■ 連絡先

〒078-8330 旭川市宮下通23丁目6番157号

NPO法人旅とぴあ北海道 代表理事 下間 啓子

TEL：0166-32-3910 / FAX：0166-32-3928

Email：info@tabitopeer.org

URL：http://www.tabitopeer.org/